

---

# twin sisters

cgren

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

twin sisters

### 【Nコード】

N7822X

### 【作者名】

cgreen

### 【あらすじ】

ある所に双子の姉妹がいました。二卵性のため外見も性格も全然似ていないのですが、2人はとても仲良し。しかしある日、姉は未知の力によって妹の目の前で異世界トリップ。驚愕した妹は姉を連れ戻すため自力でトリップをするお話です。

視点はませこぜ気味です。初めての投稿です。誤字脱字の多い文章かつ不定期更新ですがよろしく願います。

## プロローグ

「「「「ブラーヴァー！！！！」」」」

ホールが大歓声に包まれた。それを一身に受けるのは、一人のソプラノ。

『流山和美』

華奢な体から発せられたとは思えない、圧倒的な音量で曲を情熱的に歌い上げたかと思えば、小さく、細く、まるで、耳元で小鳥がさえずるような歌声を、ホールの隅々まで送り届けることができる。

その天性の喉と豊かな表現力は『奇跡のソプラノ』として世界中から称賛を浴びていた。

留学を終え本格的にプロとして活動を始めると・・・そのリサイタルの真つ最中、彼女は突如として舞台の上から姿を消してしまったのだった。

## 奈落の底へ

流山和美は、小さな頃から歌う事が大好きな少女だった。

「お歌を上手に歌えると皆が喜んでくれて、とても嬉しいの」

そう言っつて、照れ笑いする娘があまりにも可愛かったから・・・そんな理由で和美の両親は、歌の家庭教師を彼女に付ける事にした。一般的に声楽のレッスンは高額と言われているけれど、経済的に豊かな流山家にとって、レッスン料など痛くも痒くもなかったのだ。

和美は一流の教師の下で、確実に歌が上手くなっていく。

「和美ちゃんは、将来は必ずオペラ界の大スターになります！本当に楽しみですよ！」

和美の両親に何度も講師は告げたけれど・・・父親も母親も話半分に聞いていたらしい。実は、和美の実家の流山家というのは、世界でも有数の資産家で、両親は歌の教師が単に金持ちの自分達に媚を売っている程度にしか思っていなかったのだ。

しかし、和美の歌手としての名声は高校生の頃から広がり始める。音楽コンクールの高校生の部に参加すれば必ず優勝。年齢制限が無い場合でも上位入賞を果たしていた。

藝大の声楽科にも、現役で合格。

大学在学中には世界へと進出を始め、若手女性声楽家の地位を不動のものとしていった。

そして、卒業後は王道のイタリア・オペラ留学。すぐに端役ではあ

るものの本場の舞台で歌うようになる。

……学校で学んだことを舞台に生かし、舞台では実績あるプロの実演に学ぶ。

和美はイタリアでオペラ漬けの日々を過ごしながら、声楽家としてのキャリアを確実に積み上げていっていた。

そして気がつけば……小さな舞台で主役級を演じ、徐々に大きな歌劇場で歌うようになり……和美の家庭教師が言ったように、人気オペラ歌手になっていた。

その流山和美が本格的にプロとして活動を始める。

『流山和美・帰国記念リサイタル』

母国日本で行われることになった5回分の公演チケットはわずか10分で完売。ネットオークションでは、正価の数倍の高値で取引されていた。

\*\*\*

……記念公演の千秋楽

和美はプログラム最後の曲を力の限り歌い上げる。胸からは声帯を鳴らすための呼気だけでなく、達成感、安堵、感謝……万感の思いが溢れていた。でも、それらを言葉で表すとしたら、一言しかない。

(ありがとう・・・ありがとう！)

先程から心に浮びつつづける言葉。ふと、大好きな双子の妹の顔が頭を過ぎった。

『流山智美』

たった30分、自分より遅く産まれた妹。

双子と言っても二卵性なので外見はあまり似ていない。しかも、子供の頃から智美の方が体格が良かったし、性格だって彼女の方がずっと早熟だったから、一緒にいると和美の方が妹だと良く間違われていた。

『智美ちゃんがお姉ちゃん、ってことにしちゃおうよ?』

小さい頃、母親に姉妹の逆転(?)を提案して困らせたっけ・・・そんな事を考えていて、はっ、我に返る。

(いけないっ、歌に集中しなきゃっ！)

歌から意識を逸らしてしまった事を反省し、自分の声に耳を澄ませる。智美への感謝の気持ちを表すには、この独唱会で最高の歌声を響かせなければならぬのだ。

(遠く・・・もっと遠くに・・・)

そう念じながら、和美は自分の体全体が発音するようなイメージで声を飛ばし続けた。そうして、最後の一声、声量が維持できなく直前で、パシン、と音を閉じる。

突然ホールに訪れた静寂。

しかし、次の瞬間にはコンサートホール全体が揺さぶられるような喝采に包まれていた。

（終わ、った！）

観客席にいる全員と抱き合いたい。そんな気持ちのまま腕を精一杯広げ、深く深く感謝をこめて頭を下げる。すると、

「久しぶりに、和美の歌を生で聞けて嬉しかった」

頭上から、慣れ親しんだ声で話しかけられた。顔を上げれば、そこには大きな花束を抱えた妹の姿。

「あ・・・休憩中に帰ったかと・・・」

「そんな事、する訳ないでしょう？とりあえず、お疲れさま。アンコールも楽しみにしてる」

そう言つて、差し出された花束を受け取ろうと・・・和美が手を伸ばした瞬間。

ふわっ、と体が浮いたような気がした。

「え？」

一瞬、何が起こったのか分らなかった。視界には花びらを散らしながらくるくると回る花束。そして、暗闇にぽっかり空いた丸い穴と智美の驚愕に満ちた顔。

（もしかして、舞台の奈落に落ちた！？）

そう思い至った瞬間、目の前が真っ暗になり和美の意識もそこで暗転した。

## 黒髪の少女

濃い緑、薄い緑、赤味や黄味を帯びた緑。

様々な緑色を持つ木や草が整然と配置され規則的なパターンを作りだしていた。所々には色鮮やかな花壇や噴水も配されている。

--- 典型的な欧風庭園

しかし、その庭の中心を貫くように走っている道は他に類を見ないものだった。

大理石に覆われたその道は真つ直ぐで、端に立つと反対側は霞んで見えない程もある。幅・約40m、長さ・約4000mのそれは「まるで空港の滑走路みたい」と和美が後日評する事になる。

現在、この長大な「滑走路」を通る事ができるのは、庭を擁する館の主人とその弟のみ。

毎日毎日、いつ通るか分らない「2人」が、いつ使っても問題が無いよう、専門の庭師達がへこみや割れがないか確認しながら道を清めている。さらに、この道は兄弟と庭師以外が足を踏み入れればそれだけで極刑に処されるというのは誰でも知っているはずなのに・

「これは、どうした事だ？」

道を使う事を許された人物の1人は、周囲に誰も居ないと分っているが独りごちた。

久しぶりに、大理石の道を使って帰宅しようとし、念のために庭師が残って居ないかを確認すると、この屋敷に程近い場所に人の気配がした。目を凝らして良く見れば、仰向けに女が寝転がっている。

（まさか、死んでる？）

そう思いながら近づいて行き・・・耳を澄ませてみれば、規則的な呼吸音がする。ちゃんと、生きているらしい。

（どうやって、入りこんだ？）

この庭には、自分達以外のための道も用意されているとはいえ、特別な日でもない限り自分と兄以外は入る事すら許可されていない。少女など、この中央通りに入るまでも無く、庭に足を踏み入れただけで警備の者に捕らわれてしまうはずなのだ。

（他国の間者・・・は、あり得ないな）

少女が纏っているのは、鮮やかな桃色のドレス。

それには胸の部分から螺旋状にキラキラと光る白い布花が縫い付けられていて、この庭園どころか街を歩いても人目を引く衣服だ。そして、濃い色の髪は綺麗に結びあげられて所々宝石が飾られている。しかも髪だけでなく、胸元や耳元も一見して高級品と分かる宝石で飾られ、手は指先から肘まで、繊細なレースの手袋で覆われていた。

どこからどう見ても、上位貴族の令嬢。しかも少女の周りには、色とりどりの花びらがバラ撒かれていた。

（もしかして、貴族娘が庭の花目当てに忍び込んで・・・寝込んで

しまったのだろうか？)

この庭の花壇が見事なのは、良く知られていた事だった。外国の希少種もいくつか植えられているし、自分が子供の頃、その希少種見たさに植物学者が忍び込んだ事もあった。

でもあの時は・・・学者の一族は全て国外追放、所属していた大学の学長が責任を感じて自害してしまい後味が最悪だった・・・と当時の事を思い出し、ふう、とため息を吐く。

(庭だけでなく、この道にまで乱入するとは・・・この馬鹿娘がっ！)

小娘1人の所業で、娘の実家に重い罰を与えなければならないと思うと、気が滅入る。

しかし、ケジメは付けなければならない。

(いつそこれが夢ならよかったのに・・・)

と男は現実逃避をしながら、そうだ、と思い付いた。夢にしてみえ、と。

馬鹿娘など最初から居なかった事にすればいいのだ。今なら自分以外、ここに貴族娘がいた事を知る人間はいない。すぐに庭の外に連れ出してしまえば無かった事にできるのだ。そうと決めれば、行動は早い方が良い。

不幸な発見者は「俺に見つかるなんて幸運な娘だ、これで一生分の運を使い果たしたな」と心の中で悪態をつきながら、娘を抱き上げようとして・・・そこで、思考停止状態に陥った。

「髪が黒い……」

思わず、見たままの事実を声に出してしまった。

遠目に見ると濃い髪色に見えた髪色は近くで見ると真っ黒だった。

この国に濃い髪色が出る家系が幾つかあるが、完全な黒は……見た事も聞いた事も無い。

……自分の血族以外、には

ありえない……そう頭で否定しながらも男は自分の体が、ぶるりと震えるのが分った。

黒髪の少女（後書き）

なんか、いろいろ王道ですみません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7822x/>

---

twin sisters

2011年10月21日03時02分発行